

福岡県医薬品適正使用促進連絡協議会事業
処方適正化アプローチ事業を中心に

福岡県医薬品適正使用促進連絡協議会
福岡大学薬学部・福岡大学病院薬剤部
神村 英利

本講演に関して開示すべき利益相反なし

福岡県医薬品適正使用促進連絡協議会

2018年度第1回協議会 2018年8月3日

2018年度第2回協議会 2019年2月15日

2019年度第1回協議会 2019年9月6日

【開催】県民に周知 ⇒ 【協議会】傍聴可 ⇒ 【議事録】公開

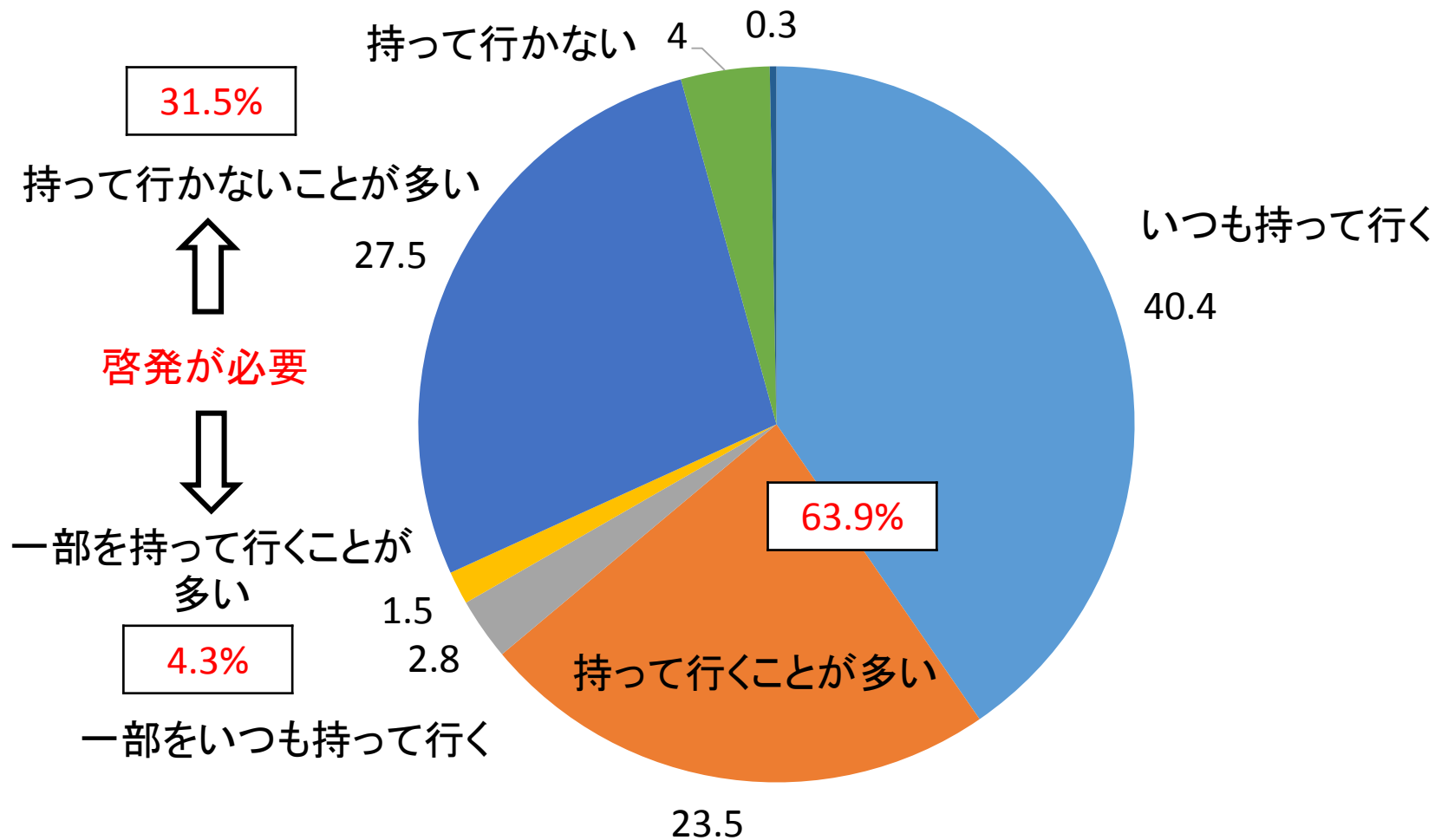
氏名	団体名	団体の役職
学識経験者	東京大学大学院医学系研究科	教授
	福岡大学薬学部	教授
	九州大学大学院薬学研究院	教授
医療・介護 職能団体	公益社団法人福岡県看護協会	常任理事
	一般社団法人福岡県病院薬剤師会	監事
	公益社団法人福岡県薬剤師会	常務理事
	公益社団法人福岡県医師会	常任理事
	公益社団法人福岡県介護福祉士会	講師団講師
保険者	全国健康保険協会福岡支部	支部長
	福岡県後期高齢者医療広域連合	健康企画課長

福岡県医薬品適正使用促進連絡協議会事業

1. お薬手帳の活用促進事業
 2. 処方適正化アプローチ事業
 3. 研修会の開催
 4. 啓発用資材の作成
-

2017年度県政モニターアンケート調査

お薬手帳の持参状況 (n = 324)



2018年度お薬手帳の活用促進事業

【目的】 お薬手帳の持参を促し、薬局における服薬情報の一元化を促進する

【取組】 お薬手帳利用啓発リーフレット・ポケット付きお薬手帳ホルダーを作成

送付対象者	複数の医療機関から一月に30日以上同一の医薬品の処方を受けている者
送付除外	がん・認知症・うつ・統合失調症の患者 死亡・資格喪失している患者 県外施設入所者
送付者数	10,344名(2018年12月)

2018年度第2回福岡県医薬品適正使用促進連絡協議会

お薬手帳利用啓発リーフレット

～お薬手帳は一人一冊に～

- ◆お薬手帳は、あなたが安心してお薬を使用するための大切な記録です。
- ◆医師・薬剤師が治療にかかわる上で重要で欠かせない情報です。
- ◆薬の重複やよくない飲み合わせを未然に防止できます。

- ・医療機関や薬局にはお薬手帳を必ず持って行きましょう。
- ・体調の変化や気になったこと、医師や薬剤師に相談したいことを、お薬手帳の余白などに書いておきましょう。
- ・飲んでいてすべての薬を一冊で記録することが大切です。病院や薬局ごとにもらったお薬手帳は『一人一冊』にまとめましょう。



「お薬手帳ホルダー」は、保険証・診察券などをいっしょに収納できます。ぜひ、ご活用ください。

2019年度第1回協議会報告

重複服薬の発見 お薬手帳一冊化の指導

- ・現在飲んでいてお薬で副作用のこと、飲みにもよりますが、他のお薬や食べ物との飲み合わせ、自分の飲んでいてお薬の重複はできれば減らしたい。それぞれもらったお薬が重複していないか確認してみませんか？



なること、相談したいことがございましたら、ぜひ、お薬手帳にご相談ください。

福岡県保健医療介護部薬務課・医療保険課
福岡県医薬品適正使用促進連絡協議会

2018年度第2回福岡県医薬品適正使用促進連絡協議会



症例提示①

60歳代、女性、157 cm、81.8 kg、eGFR 35.8 mL/min/1.73m²

子宮体部原発神経内分泌腫瘍の多発肺転移で化学療法のため紹介入院

【持参薬】

アムロジピンOD錠 10 mg

ランソプラゾールOD錠 15 mg ←

ロペラミドCap 1 mg

ジフェニドール塩酸塩錠 25mg

ポリスチレンスルホン酸Ca 5g/包

ブロチゾラム錠 0.25 mg

ツロブテロールテープ 2 mg/枚

フランドルテープ 40 mg/枚

消化器症状がない
消化器疾患の既往もない
NSAID・アスピリンも処方されていない



【かかりつけ薬局に問い合わせ】
2年前のセレコキシブ開始時から



中止忘れ？・漫然投与？



【疑義照会】中止を提案



中止



消化器症状なし

症例提示②

77歳、女性

【既往歴】洞不全症候群、肥大型心筋症、心不全、左膝内視鏡手術後、胃潰瘍

A医院からパーキンソン病の精査・加療目的で紹介入院

【持参薬】

A医院

シルニジピン錠 10 mg

フロセミド錠 20 mg

アピキサバン錠 5 mg

ブロチゾラム錠 0.25 mg

B医院

ランソプラゾール錠 15 mg

スルピリド錠 50 mg ←

モサプリドクエン酸塩錠 5 mg

センノシド 12 mg

吐き気、食欲不振、胸焼け：なし
ランソプラゾール、モサプリド投薬中



パーキンソン様症状を惹起する？
他の併用薬で消化器症状は
コントロール可能？



【疑義照会】中止を提案



中止



消化器症状なし

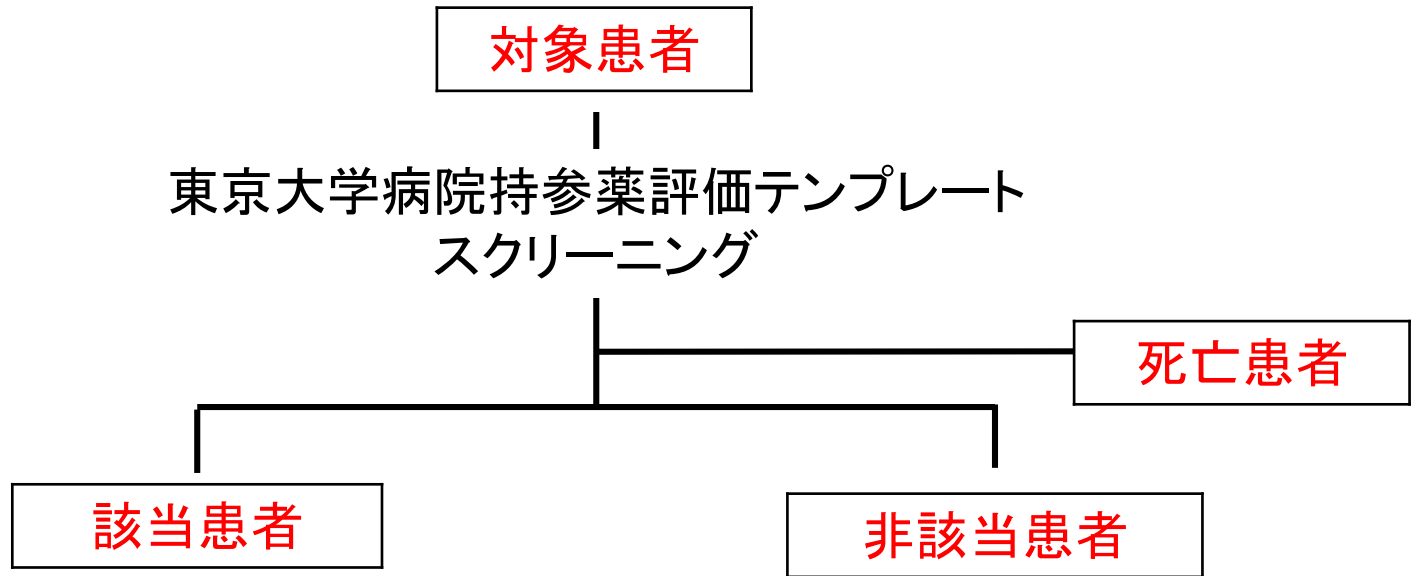
2018年度処方適正化アプローチ事業

【対象】2018年10月～11月に協力医療機関の**一般病床**に入院した
65歳以上の患者

電子カルテが導入
研究倫理委員会が設置

協力医療機関	診療科
A病院	心臓血管外科、循環器内科、脳神経内科 脳神経外科、内科、整形外科、外科、耳鼻咽喉科 呼吸器外科、泌尿器科、眼科、形成外科、皮膚科 救急科
B病院	整形外科、外科、泌尿器科、乳腺外科 糖尿病内科、神経内科
C病院	心臓血管外科
D病院	糖尿病内科、整形外科
E病院	内科、整形外科
F病院	内科

2018年度処方適正化アプローチ事業



スクリーニング項目

- 服薬困難で薬剤調整希望あり
- 高齢者の安全な薬物療法ガイドライン2015「特に慎重な投与を要する薬剤」が処方
- 服薬管理能力の低下
- 効果や副作用の観点
- 疾患や肝・腎機能の観点
- 同種同効薬の重複
- 薬物相互作用の観点

2018年度処方適正化アプローチ事業

患者背景

	該当患者	非該当患者	p値
患者数(名)	151	118	—
男性 / 女性(名)	89 / 62	55 / 63	—
年齢 ^{a)} (歳)	79.0 ± 7.8	80.5 ± 9.5	0.148
入院時薬剤数 ^{a)} (剤)	8.0 ± 3.6	3.7 ± 2.8	< 0.001

a) 平均値 ± 標準偏差

1. 高齢であっても入院時薬剤数が少ない患者もいる
2. 処方の適正化が必要な患者は不要な患者に比べて、入院時薬剤数が多い

2018年度処方適正化アプローチ事業

減薬された患者の割合

	該当患者	非該当患者	p値
減薬患者数 / 総患者数	67 / 151 (44%)	6 / 118 (5%)	< 0.001

東京大学病院持参薬評価テンプレートは
処方の適正化が必要な患者のスクリーニングに適している

福岡記念病院の該当患者

1. 薬剤師が介入したが、患者の希望で減薬できなかった 5例 / 32例 (16%)
⇒ 患者・一般市民の啓発も必要
2. 入院翌日の退院等で、介入するタイミングがなかった 11例 / 32例 (34%)
⇒ 一般病床では処方の適正化を完遂できない場合がある

2018年度処方適正化アプローチ事業

減薬の実施状況(症例の重複あり)

スクリーニング項目	減薬患者数	該当患者数	減薬実施率(%)	p値 ^{b)}
薬剤調整希望	10	12	83.3	—
ガイドライン ^{a)}	56	131	42.7	0.017
服薬管理能力	7	24	29.2	0.007
同種同効薬	3	3	100.0	0.849
効果・副作用	17	19	89.5	0.958
薬物相互作用	0	0	—	—
疾患・肝腎機能	11	11	100.0	0.499

a) 高齢者の安全な薬物療法ガイドライン2015「特に慎重な投与を要する薬剤」が処方

b) 薬剤調整希望による減薬実施率と比較

1. 処方適正化の緊急性が高い患者 ⇒ 減薬される確率が高い
2. 処方適正化の緊急性が低い患者 ⇒ 減薬される確率が低い

2018年度処方適正化アプローチ事業

減薬された患者の薬剤数(症例の重複あり)

スクリーニング項目	患者数	入院時薬剤数 ^{b)}	退院時薬剤数 ^{b)}	p値
薬剤調整希望	10	9.8 ± 3.0	7.4 ± 3.9	0.013
ガイドライン ^{a)}	56	8.9 ± 3.7	7.3 ± 3.7	< 0.001
服薬管理能力	7	8.9 ± 4.5	8.1 ± 3.9	0.220
同種同効薬	3	12.7 ± 5.5	8.0 ± 3.6	0.060
効果・副作用	17	10.4 ± 4.2	9.1 ± 3.8	0.012
薬物相互作用	0	—	—	—
疾患・肝腎機能	11	入退院時の差 1.6薬剤 / 患者		0.009
計	67	9.1 ± 3.8	7.5 ± 3.8	< 0.001
非該当患者	6	5.0 ± 3.1	2.7 ± 2.8	0.034

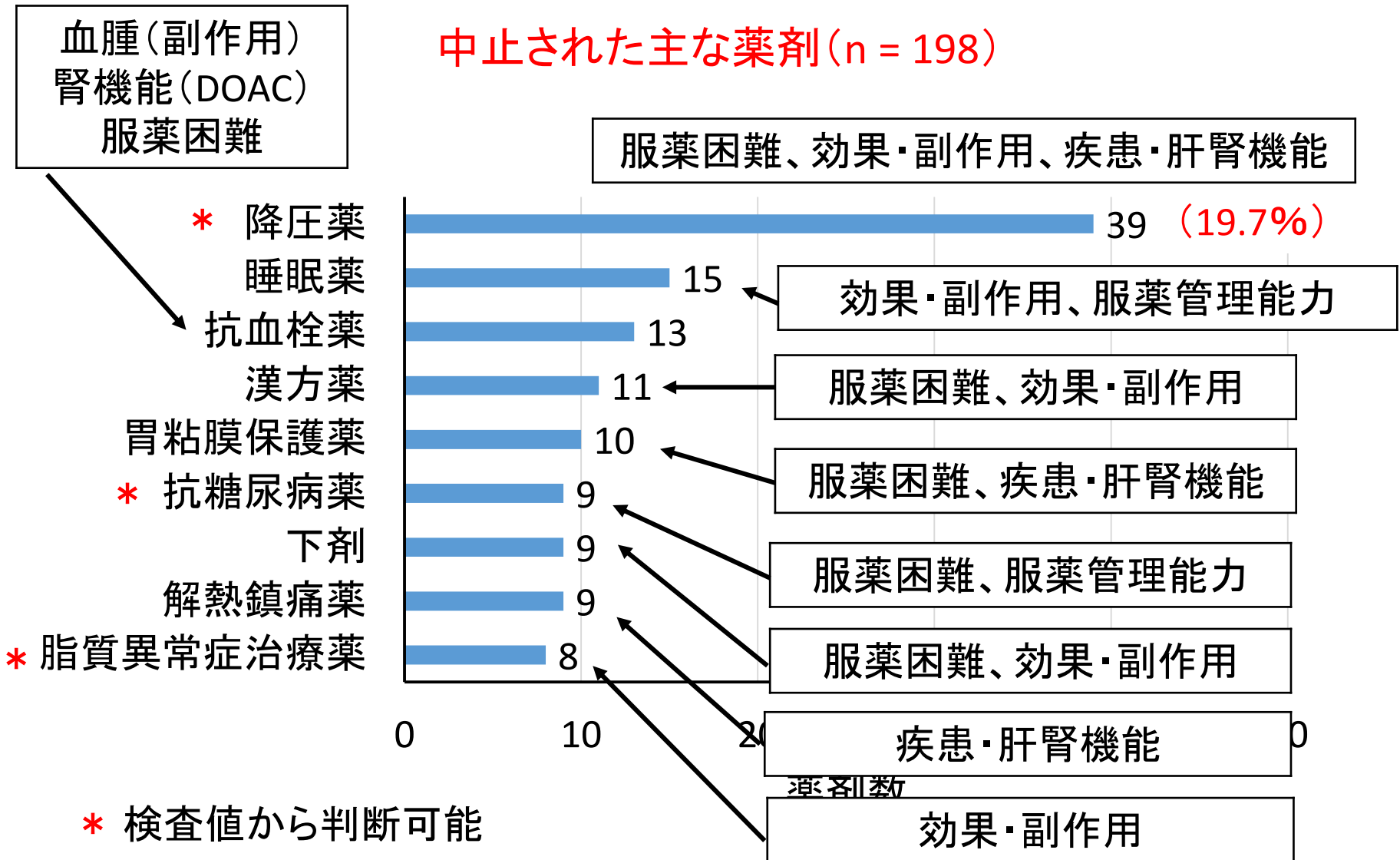
184薬剤 / 67患者 = 2.7薬剤 / 患者

a) 高齢者の安全な薬物療法ガイドライン2015「特に慎重な投与を要する薬剤」が処方

b) 平均値±標準偏差

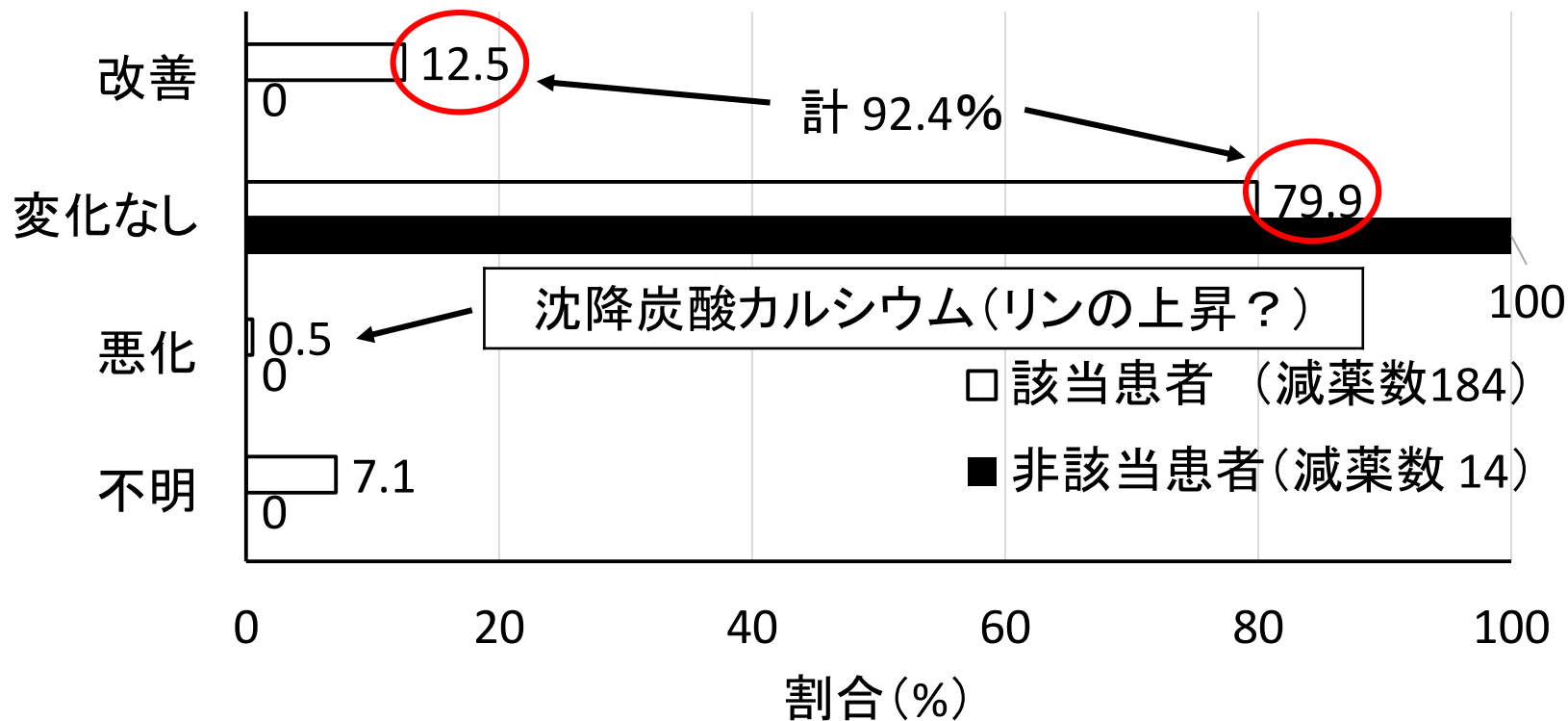
2018年度処方適正化アプローチ事業

中止された主な薬剤 (n = 198)



2018年度処方適正化アプローチ事業

減薬後の転帰 (n = 198)



減薬後の転帰は概ね改善～変化なし

⇒ 減薬された薬剤の多くは中止して差し支えなかった

2018年度処方適正化アプローチ事業の成果

1. 東京大学病院持参薬評価テンプレートは、処方の適正化が必要な患者のスクリーニングに適している
2. 一般病床では、緊急性の高い事例で処方が適正化されることが多い
3. 一般病床では、中止となる処方がある一方で、追加される処方もあるため、入退院時の薬剤数の差は大きくない
4. 処方の適正化は、一般病床の入院中には完結しないことが多い
5. 処方適正化のためには、医療従事者のみならず、患者や一般市民の啓発も必要である

2019年度福岡県医薬品適正使用促進連絡協議会事業

○処方適正化アプローチ実施事業

福岡県内での指針の活用実績を得るため、協力医療機関を選定し、東大病院で実施している「薬剤師による持参薬評価テンプレートを用いたスクリーニング」を導入して、減薬アプローチを実施する。

【2018年度】

2018年10月～11月で、6つの協力医療機関に新規入院した65歳以上の患者を対象に実施した。

【2019年度】

2018年度の医療機関は一般病院であったことから、2019年度は入院期間が長い医療機関で取組を実施する。

○研修会の開催

指針の普及・浸透を図るため、医師、薬剤師、看護師等の多職種を対象に、減薬アプローチの取組事例等の講演を実施する。

- ・ポリファーマシー対策のための指針
- ・減薬アプローチの取組事例
- ・高齢者に特徴的な有害事象
- ・高齢者に適切な薬物療法
- ・国や県の動向、取組

○お薬手帳の活用促進事業

服薬情報の一元化を図り、お薬手帳の正しい活用を促進するため、75歳以上の重複服薬者に対して、リーフレット及びお薬手帳ホルダーを送付し、その効果を解析する。

【2018年度】

- 抽出条件
複数の医療機関から30日以上同一の医薬品の処方を受けている者
- 送付者数 10,344名

【2019年度】

抽出条件該当者の増減や送付対象者のお薬手帳の持参状況を確認し、その結果を踏まえ、抽出条件や抽出期間を検討して、新たな対象者に送付を行う。

○啓発資材の作成

医薬品の適正使用には患者とその家族の理解と協力、医療関係者からの丁寧な説明と情報提供が必要不可欠であるため、服薬指導の際に活用可能なポリファーマシーに関する啓発資材を作成する。



例) 日本老年医学会
作成パンフレット

福岡県医薬品適正使用促進連絡協議会事業の進捗状況

	2018年度				2019年度			
	4~6	7~9	10~12	1~3	4~6	7~9	10~12	1~3
協議会		● 第1回		● 第2回		● 第1回		● 第2回
処方適正化 アプローチ 実施事業		準備・実施・解析				準備・実施・解析		
お薬手帳 活用促進事業		対象者選定	● 配布			解析	対象者選定	● 配布
研修会						● 第1回		
啓発資材の 作成							内容検討・配布準備	● 配布

Take Home Messages

～医師・薬剤師の先生方へ～

1. 定期的な処方を見直しをお願いいたします
2. 患者が多科受診している場合は、
併科処方の確認もお願いいたします